銀塩かデジタルか

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

最近のデジタルカメラの普及はめざましい。いまさらながら銀塩（フィルム）かデジタルか？などと言ってみたところで、フィルムを使用している人など今日では極少数派であり、論争など成立しないかもしれない。写真作品を制作しているプロや写真愛好者の中には、写真の調子が変わるのを嫌ってフィルムを使い続ける人は多いが、それ以外でフィルムを使っているのは、フィルムカメラを引退させるには忍びないといった物持ちがよい人だけのようにさえ思える。マスメディアの中でもスピードが最重要とされる報道の世界では15年ほど前からデジタルカメラに移行され始めていたが、その後のデジタルカメラの進化はすさまじく、現在では全体のほぼ九割近くを占める勢いとなっている。我々の職場でも8年ほど前から完全にデジタル化され、今からフィルムに戻ることなどはとても考えられない。デジタルの利便性はフィルムとは比べ物にならないのは明らかで、両者を比較すること自体無意味な設問といえる。

しかしながら、なお現時点において私はデジタルに対し不審や不安を抱いており、あえて問題提起してみたいと思う。

デジタルとフィルムの違い

デジタルカメラの大きな特徴（利点）を挙げると、

＊撮影直後の画像確認が可能。

＊撮影途中で感度やホワイトバランスを変えることが出来、室内や舞台撮影、暗い場所などでストロボ無しの撮影に威力を発揮。

＊撮影現場からの画像データ送信により、配信や印刷までの大幅な時間短縮。

＊ＲＡＷデータでの露出許容範囲の広さ。

＊長時間撮影における相反則不規（短時間及び長時間露出時に起こる露出不足）が皆無。

＊後処理が可能な為、カラーとモノクロの同時撮影も一台のカメラで済む。

＊空港でのＸ線照射による感光の心配がない。

＊長期撮影旅行におけるフィルムとデジタル用メモリーカードの携行性を比べれば容量・重量とも桁違いの差・・・etc。

圧倒的な優位性を持つデジタルには闇（くらがり）さえも写し出す能力があり、フィルムでは撮影をあきらめていたシチュエーションでもデジタルでは不可能ではなくなった。

一方フィルムの特徴を挙げてみると、雑誌などに掲載された写真がデジタルで撮られたものかフィルムなのかは必ずしも判るものではないが、同時に同じ自然風景をデジタルとリバーサルフィルムで撮影したものを比べてみれば一目瞭然で、透明感があって瑞々しさに溢れるような画像はフィルムに軍配があがるだろう。デジタルはコンピュータ上のレタッチで調整可能だという人がいるが、それにしてはリバーサルフィルム並みの写真が出来ないのはどういうことなのか。リバーサルフィルム画像の美しさは多くの写真愛好者を惹きつけてやまず、いまだ使用され続けられる大きな理由であろう。

色調に関するデジタルカメラの問題点として、カメラによって色再現が違いすぎることが挙げられる。同じメーカーでも機種によって違うこともあるので困る。フィルムカメラの場合、各社のレンズに多少癖があっても、フィルムの種類による違いのほうが大きかったので、好みのフィルムを何種類か使い分ければそれで済んだ。しかしデジタルの場合は各社各機種で画素受光センサー（ＣＤＣやＣＭＯＳ）に特徴があり、買ったカメラの色調が気に入らない場合、他機種に買い変えなければならなくなる。またデジタルは製品開発が日進月歩で、常に最新のスペックを求めようとすれば、その出費は大変な負担となる。

撮影には専門知識と技術が必要とされる中判カメラ(6ｘ9センチ)一式。高性能デジタルカメラの中にはフィルムカメラの中判サイズに匹敵する高画像のスペックも登場し、デジタルカメラの普及によって誰もが高画質の写真を撮ることが出来るようになった。

煩雑なデジタルデータ管理と認識すべき危険性

デジタルデータ画像はフィルムのように時間経過と共に褪色することもなく、永久に劣化しない状態で記録される理想的なものである。しかし問題は劣化することのないデジタル画像を保存するＨＤＤ（ハードディスクドライブ）や各種記録媒体が、故障や退化によるトラブルでデータ消失の危険性が非常に高いということである。

一般的な安全策として、撮影したオリジナルの画像はＰＣ内のＨＤＤと外付けＨＤＤに保存し、加えて製造元の違うＤＶＤ三種に保存しておく。違うメーカーでも製造元は同じ場合があるので、この点注意する。ＤＶＤは容量いっぱいに保存すると、時間経過と共に後半部分の記録が読めなくなることがしばしば起こる。ＤＶＤなどの磁気ディスクは早くて4～5年、長くとも20年でデータは消失して読めなくなるので、およそ5年ごとに更新する必要がある。デジタルデータ保管サービス会社を利用する方法もあるが、金額の問題や通信トラブル、当該会社へのサイバー攻撃、倒産なども考慮しなければならない。

こうしてみると案外デジタルデータの管理は厄介なのである。まずＤＶＤ三種を5年ごとに更新するといっても、日頃たくさんの写真を撮る人にとっては、これはとんでもないほど大変な作業になる。光磁気デスクのＭＯやＤＶＤ－ＲＡＭのほうが長期保存に耐えられるようだが、データを読み出す再生機器がなくなる可能性もある。より新しい記録媒体が出現して主流になれば、古いメディアはいずれ読めなくなるだろうから、大量のＤＶＤなどはすべて新メディアに書き換えの必要に迫られるだろう。他のシステムに変更しなければならない事態を、常に心がけておくことが肝要だ。プロカメラマンの中にはこうした諸々の煩雑さを嫌い、クライアントに提出すれば完了の仕事関係はデジタル、自分の作品や家族写真はフィルム、と使い分けている人も多い。

今までカメラにはまったく縁のなかった人たちにまで一眼レフを始めとする高性能デジタルカメラを普及させ、撮影からプリントまで手軽に自分で出来る楽しさを教えてくれたのはデジタルの功績である。しかし現在の急激なアナログからデジタルへの移行は、思い出が詰まった大切な写真や旅の記録を消失させてしまう危険性を孕み、将来多くの家庭から赤ん坊の時撮影された写真が成人式を迎える頃には失われてしまうといった事態も危惧されている。私自身も撮影取材した写真がＨＤＤのトラブルで、バックアップをとる前にすべて消失したこともあり、また仕事で保存してあるＣＤ－Ｒの一部が読めなくなり始めている。書き換え作業も労力と予算の問題で、あまり進んでいないのが現状である。

カメラメーカーはデジカメのスペックを高めることのみに腐心し進化させ続けているが、デジタルデータの保存問題の解決が最優先課題であり、カメラメーカーがこの問題に無関心で、コンピュータ及びメディア関連会社に任せきりにしていることには不信感を持たざるを得ない。

フィルムカメラは多種多様のサイズがあり、目的にあわせて選ぶことが出来る。写真は各サイズのリバーサルフィルム。右上35ミリ、右中6ｘ4.5センチ、右下6ｘ6センチ、中上6ｘ9センチ、中下6ｘ7センチ、左4ｘ5インチ。この他に巨匠エドワード・ウェストンやアンセル・アダムスが愛用した8ｘ10インチ（六ツ切）及び10ｘ12インチ（四ツ切）や11ｘ14インチなどのカメラもある。現在一般に入手可能なのは8ｘ10インチがマキシマムのようだ。

長い歴史で実証済みのフィルムの良さ

このコラムで掲載した写真の八割近くはカラーリバーサルフィルムで撮影したもので、中には40年前に撮影したフィルムも含まれている。当時のリバーサルフィルムはかなりの褪色が見られるが、コダクロームだけは経年変化せずに色素もほぼ当時のままなので使用に際し支障はなく、その耐久性に驚いている（現在は発売中止）。

1970年代後半にリバーサルフィルムの処理方法が大幅に改良され、エクタクロームやフジクロームの改良タイプはコダクローム同様に長期保存に耐えるといわれているので、管理さえよければデジタルより安心といえるのではないだろうか。改良タイプのリバーサルフィルムは発売から30年以上経過したが、現在でもほとんど褪色していない。またモノクロームならば百年以上前のフィルムでも問題なくプリントできるのだから、フィルムは優れものである。

写真の将来

大判及び中判カメラで撮影したフィルムをフィルム専用スキャナーで取り込んでプリントすると、高性能デジタルカメラで撮影した画像を凌駕するほどの色調や鮮鋭度の高い優れたプリントを作ることが出来る。この方法は展示用などの大伸ばしプリントには大いに利用価値がある。また現在プロラボで使用している長期保存性の高い業務用銀塩プリンターは、原版がフィルムの場合も一度画像をデジタルデータ化してプリントしている。このようにアナログとデジタルが融合してよいものを作り出し、お互いを補いながら進歩することは写真の将来にとって重要である。銀塩は化学反応、デジタルは電気信号を利用して現実を写し撮るものであるが、この特性を生かした独自の表現世界がもっと追求されるべきであろう。ユーザーは銀塩とデジタル双方の表現方法を選択できることが理想的であり、21世紀の写真はより多様性を持つことが、写真の新たな発展に繋がることになるだろう。

デジタル用メモリーカード（手前）と大判（4ｘ5インチ）や中判(6ｘ6センチ)用カメラのフィルム及びフィルムホルダーを比べてみれば一目瞭然。デジタルは荷の軽減という点からも大変有利である。その反面、優れた利便性ばかりに目がいって、静電気などの要因により一瞬にして記録画像が消失してしまうこともあるデジタルの危険性は忘れがちになってしまう。